

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより
第38号
2020(令和2)年2月26日
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

木綿製品の中でも上等品 — 真岡木綿、真岡晒 —

栃木県真岡市にある「真岡木綿会館」を訪ねてきました。「真岡」は「もおか」と読みます。真岡木綿の歴史について、会館の資料には以下のように記されています。

「かつては『真岡』といえ、そのまま木綿の代名詞として通用した時期がありました。丈夫で質が良く、絹のような肌ざわりの真岡木綿は絶大な人気を得て、江戸時代の文化・文政・天保の頃には年間三十八万反を生産し、隆盛を極めました。当時、江戸の木綿問屋はこぞって真岡木綿を求め、木綿の仕入高の約八割が真岡木綿であったという記録があります。」(真岡木綿会館発行リーフレット『真岡もめん』より)

真岡木綿を有名にしたのは晒(さらし)です。江戸時代後期、すなわち文化・文政・天保期にあたる19世紀前半には大量の真岡晒が江戸市場で取り扱われていたことが知られています。その経緯について、『真岡市史』第7巻近世通史編は次のように記しています。

「(関東地方、とくに)下野でいつごろから綿が栽培されたかは確めることはできないが、真岡晒が江戸市場にかなり早くから現れているので、一七世紀前半には栽培する地域が広がっていたとみてよかろう。…(なかでも)下野南部の真岡周辺は綿作可能な地域であることから、ここで晒木綿が生産されるようになったきっかけは、農家において綿作—綿繰り—糸紡ぎ—機織りが普及し、衣料の自給がなされたうえ、川水を利用しての晒加工によってより上質の織物となることを知ったからであろう。最初から都市向け、全国市場向けの織物として案出されたものではなく、あくまでも庶民衣料として生産・加工されたものが、その使い心地の良さのため広く流通するようになったとみてよいのではなかろうか」(p403-404)。そして、機織りが副業として成り立つことを知った農家が、自作の綿だけでは足りず繰綿を購入するようになると、繰綿を斡旋する商人が活躍をはじめ、「繰綿出荷地である大和の間屋たちと、久下田(真岡)商人との交渉を示す史料が真壁の中村作右衛門家に遺される」(p405)とあるように、当初は畿内産の繰綿が関東の綿業を支えることになっていくのです。ただ、その後は関東方面でも綿作が盛んに行われるようになると、畿内産繰綿の需要は減っていきます。大和の綿作が18世紀前半期をピークに下降しはじめる理由の一つがここに窺える、とも言えそうです。

真岡木綿の商取引は延宝期(1673-1681)以前よりなされていたらしく、やがて「農家で一反、二反と織られた木綿が、村の様子をよく知った小仲買によって買集められ、数十反、数百反の単位で仲買に売られる。仲買から数百反、数千反の単位で買集める買次は…大量の集荷を行ない、江戸の木綿問屋と数千反、数万反の取引をしていた」(p422)ようです。「真岡晒は木綿製品のなかでも上等品であり、手間のかかることもあって生産量をすぐ拡大することは困難な商品だった」(p424)からこそ、高い商品価値を持つに至ったのでしょう。



真岡木綿会館 (栃木県真岡市)

Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和2年1月24日～令和2年2月23日)
千葉県1、東京都1、神奈川県2、大阪府1、奈良県2、福岡県1、鹿児島県1
【H.A.M.A.木綿庵】(令和2年1月24日～令和2年2月23日)
メールを含む各種相談件数11、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数3件7名



〈真岡晒の加工技術について〉 — 染めあがりを引立てさせる優秀な技術 —

「真岡木綿が江戸市場において高評を受けた理由が、染めあがりを引立てさせる優秀な晒加工技術に」（『栃木県史』通史編5のp5）あり、「真岡木綿は白木綿を晒加工したものにすぎぬとはいえ、『製法ノ精密ト原料ノ佳良』によつて廣く愛用され、その需用者は公家・武士階級にまで及び、享保頃（1720年代）には、全国的にその名を知られるにいたつた」（『下館市史』上巻p702）とあります。

その晒技術について、『真岡市史』第7巻には具体的に以下のように記されています。

「職人たちは川水を汲んでわかし、臼に入れて木綿を浸し杵でつく。これは織糸につけた糊をとるためである。つき上げた木綿を川につけてよく振洗いし、干したうえできぬたにかけて打上げたものが水振り木綿といい、最も加工度の低いものである。この水振りを石灰汁をすましたなかにつけたうえで杵でつき、干上げたうえでまたつくという工程を四〇～五〇日間繰返す。最後に清水を用いて臼でつき、石灰分を抜いたうえで乾し、槌で打って仕上げたものが本晒である。…史料によつては一〇〇日を要すとしたものもあり、極めて長期の手間を必要としたのである。途中の工程を短かくしたものが半晒で、本晒・半晒・水振りの三種類があった」（p434-435）。

《綿の栽培記録 2020》 — 令和2年度版 その2 —

今年の綿の栽培は、今年の1号畑（乙木）、5号畑（竹之内）、6号畑（竹之内）、7号畑（乙木）に加えて、新たに8号畑（田井庄）でも行う予定です。8号畑はこれまで水田であったため、畝を立てるところから始めなければなりません。8号畑の畝立てと、7号畑の溝掘りに取り組み始めたものの、2月は定期的によく降る雨のため、作業はなかなか思うようには捗りません。写真左：7号、中：7号、右：8号。



【綿の加工の作業記録】（梅田 1 人の作業量）

- 糸車を用いての糸紡ぎ量（和綿：平成29年, 2017産。丹羽正行氏による打ち綿）
1月24日～2月23日（作業実日数22日）糸の総量142.9g（38.1匁）総時間330分（5時間30分）
※1分間≒0.433g 1時間≒26.0g（6.9匁）

【研修等の記録】

- 令和2年2月02日 「第52回天理市民体育大会」一般女子駅伝出場者応援。（天理白川ダム運動場）
- 令和2年2月23日 講演会「ひきこもり支援に取り組んで10年」講師を担当。茨城県水戸市。
- 令和2年2月24日 「真岡木綿会館」（栃木県真岡市）を訪問。真岡木綿保存会代表者様と懇談。
- 令和2年2月24日 「久保記念観光文化交流館」、「金鈴荘」（栃木県真岡市）見学。
- 令和2年2月24日 筑西市立中央図書館（栃木県筑西市）を訪問。下館の真岡木綿について調査。

【下段の写真は左：真岡木綿会館内の小物売り場。中、右：久保記念観光文化交流館の真岡木綿と機織り】

